

## コメントB：安西迪夫（国語教育の立場からの反省と意見）

### 言語の機能の一つ - 認識の機能 -

安西　それでは、コメントの用紙が一部ございます。私は前は学校教育学部を持っている大学にありまして、現在、社会情報学部という学部の大学の教員です。社会情報学部に入りまして、学生の表現力などを見ても、「日本の国語教育というのは果たして生きて働いているのかな」という印象を持ちました。とにかく、語彙が不足している。最近、大学にはいろいろな学部ができたのですけれども、経済学（部）とか法学（部）は辞書に出てくるのです。社会情報学（部）というのは辞書にも出てこない。情報関係のことばというのは、新しいことばがどんどん出てきておりまして、20年に1回とか10年ごとに改訂しているような辞書では役に立たない、というような国語辞典の現状ということにはたと気がつきまして、これは大変だなあ、という思いがありました。

ところで、いろいろなお話が出ましたが、これからの国語教育において特に重視したいことを3つに分けました。まず、ことばの働きあるいは言語の機能というのは何かということ。熊澤竜先生の考えと今日この席にお見えになっております湊吉正さんのお考えを参考としております。言語の第一機能というのは、認識の機能だというのが、熊澤先生や湊さんのお考えなわけ。ことばというものと認識の関係というのは非常に難しく、認識とは何かということも、哲学辞典や心理学辞典を引くと皆少しずつ違いますね。認識と思考というのは一体どう関係するのか。ある辞書は思考も認識に入っている。ある辞書は認識と思考を分けているけれども、実際具体的にどう区別するかということもはっきりしない。そういうところが、先ほどから問題になっております日本語教育でも国語教育でも抽象的なことばについてはどのように理解させるかという問題と結びつく。

さて、その認識の機能がその一つだということになると、国語教育というのはまず、他教科も含めて、（国語科教育はもちろんのだけれども、）認識との関わりの中において、物事を確実に把握するというのをきちんと押さえるべきではないか、ということになります。

例えば、「みみず」ということばがあります。前にいた私の大学は教育実践場面の研究という演習をやっている、10年ぐらいずっと続けたことがあります。実際の授業の記録をとって、子どもの言語認識がどう変わっていったか、子どもたちがどういう成長をしていったかという記録をたどっていったことがあるのです。綿密な記録をたどって、何が出てきたかという、教科教育実践論というのはなかなか難しいというため息であったように思われる。記録はたくさんとって、経過はよくわかるのだけれども、実際そこから言語教育、国語教育というのがどうあるべきかということが、なかなかそこでは見えてこなかった。私たちも記録は全部保存してありますけれども、何かそれを使うことはできる。しかし、細かい部分については「そうか、これはこうなんだな」ということができるのですけれども、全体的に国語科教育はどうあるべきか、ということなかなか見えてこなかった。国語教育論、あるいは国語教育研究の難しさについて、今朝の開会のあいさつの中で、水谷所長がおっしゃいましたが、まさにその通りなのです。これから、このプロジェ

クトも長い研究をやらなければならないのかな、というふうなことを感じております。

「みみず」ということばは、その実践場面の演習の中で出てきたことばなのです。これは、辞書を引きますと、「環状動物の一つ。細長くて丸い節がついている」というふうに書いてあるのです。ところが、国語の教科書に出てきます「みみず」というのは、花が非常に豊かに咲いている。咲いているのは何故かということ、下にみみずがいるのだ。みみずがいて、腐植土を作って、それで花が奇麗に咲いているという詩があるのですね。そういう詩を引いてみると、これは理科的なものか、国語的なものかということになりますと、教科の方ですと理科の方ですと環状動物の一つ、環状動物にはどういうものがあるって、その中のみみずは一つ、どういう特色があるかということがやれるのでしょけれども、やはり、理科的な発想のことばの教育と国語教育のことばの教育とは違うのではないか、という気がします。

2番目は、ことばと認識との関係を各教科の分野において、どう理解するかということ、これは国語科教育とある程度一線画さざるを得ない面があるのではないかと、ということです。それは、本来他の教科の専門分野においてやっていただくことを、国語の先生が指導することは危険だなあ、という気がいたします。ここに、学校教育の中の国語教育と他教科の国語教育との関連・協力の問題があることとなります。

## 経験学習の大切さ

それから、ことばを身につけるということは、やはり経験学習が大切です。ことばの学習は言語行動を通して、ことばを身につけさせるという方法しかないのではないかと。総合がある意味では理想的なのですけれども、先ほども甲斐雄一郎さんから総合というのは、過去の歴史の中でいろいろな問題があったと指摘されましたけれども、その総合の中でことばを身につける、生きた言語を身につける、理解させるということがまず、基本にあるべきではないか、ということが私の考えです。

## 言語をことばとして捉える

それから、先ほど言ったように、社会とのかかわりから見た日本語の構造とか、日本人の意識から見た日本語の特質、そういうものを国語教育は今まであまり触れてこなかった。特に、外国語との比較において、そういうことをやってこなかった。それは、将来の国語教育の課題ではないか。これは、言語を文化として捉える（言語文化）垣内松三の考え方に通じます。

**甲斐△** ありがとうございます。まだ、一度も発言していただけていない方が何人かいらっしゃいます。その中で、午後駆けつけてくださいました文部省の田中孝一さん、お隣りの中国の華東師範大学の徐敏民さん、それから、お忙しいところを駆けつけてくださいました文部省の小森茂さんのお3人に、御感想などをお願いしたいと思います。

## 教科書・教材のあり方

田中 文部省の中学校課・高等学校課の田中でございます。もともと、高校の教員として公立学校にいました。今、4人の先生方のお話を伺ったわけですが、いろいろ考えたり、あるいは現在自分の仕事として行なっていることなどを照らし合わせながら、感想を持ちました。1つは、先ほどの甲斐雄一郎さんのお話との関連で教科書依存が91パーセントという数字、それから、それが歴史的経緯を持っている、あるいは、そこから何とか脱却しようとして、いろいろな綴り方運動をはじめ、現在に到るまでの新しいいろいろな歩みがあるというお話でした。

学習指導要領の次の次、おそらく10年後ぐらいになるところでは、教科の再編・統合というのやりなさいということにも中教審の第一次答申でなっております。今日一日のいろいろなお話の中で、日本語教育とどう関わるのかとか、あるいは、他の教科との関連のこと、また、現在の教科書の形態がペーパーであるということで、例えば音声や作文などはなかなかしにくいのではないかと、というお話がありました。是非、私としては、教科書のあり方と学習指導のあり方との関係を考えたいと思います。例えば、学習の媒体としては、ペーパー形式、書物形式の教科書や、補助教材としてのテープとかビデオとか、形態としてはありますけれども、その中で、例えば先ほどの例でいきますと、音声言語にする作文にする、実際の書物としての教科書の中で、作文や音声言語の教材が教材としてどのような形で成り立ちうるのかということ、国語教育以外の、特に日本語教育の立場の方からいろいろお話が伺えれば、というふうな感想を持ちました。

## 言語環境の整備

徐 今日、皆様の御発表を聞かせていただきまして大変いい勉強になりました。感想を3つぐらい述べさせていただきたいと思います。

まずは、柳澤さんの午前中の御発表の中でおっしゃいました言語環境の問題です。一般的に日本語教育を指導なさっている先生方が一番悩んでいることは、どういうふうに日本語の力を伸ばすことができるかという問題でしょうが、私は言語能力を伸ばすよりも、言語環境の整備がもっと大事だと思います。例えば、今外国人児童の中で、中国人の子どもたちがかなりの部分を占めていると思いますが、中国人の子どもの場合は、年少者はあまり大きな問題はないと思います。日本語の習得は数か月か、半年も経てば自然に覚えられると思いますが、年少者の場合はアイデンティティーの問題が重要だと思います。私の娘は小学校を卒業するまでは筑波に滞在しましたが、筑波という良い環境に恵まれて、ほとんど何も問題が起こらずに、明るく育っていきました。ですから、言語環境がいかに大事かが言えるわけです。もう少し詳しく申しますと、その小学校は外国人児童が54名もおりますし、帰国児童も含めて3分の1ぐらいは異文化を経験している子どもたちでした。ですから、すぐお互いに仲良くなって一緒に遊んでいましたので、ことばの勉強はいつ覚えたのか、知らない内に覚えてしまったように思います。

私の娘は12歳の時に帰国しました。中国に帰ったら、よく私の知人からいじめの問題がありますかなどといろいろな心配していただいたり、聞かれたりしたことが度々ありまし

たが、大学の附属中学校に入れましたので、本当に何も心配もなく、温かく迎えられました。もう3年経ちましたが、中国語はもちろん、大体問題がなくなりました。

いじめ問題には、日本の文化的、社会的な要素という問題も関係しているかと思いますので、学校のシステムをもう一度考え直さなければならないでしょう。外国人児童だけではなくて、帰国児童とかいろいろな問題が関わっていると思います。以上、言語環境について、私の体験を通して感じたことを申しました。

## バイリンガル教育の必要性

2番目は、日本も一応先進国と呼ばれる国になっておりますので、そろそろバイリンガル教育を行なわなければならないのではないかと思います。今の日本には、外国人がたくさん住んでいますし、これからの日本、21世紀の日本を見ても、やはりバイリンガル教育を考えなければならない状態になっております。

例えば、日本で学んだ中国人の生活行動は3つのタイプに分れています。一時滞在者と永住者とそれから帰国者という3つのタイプがあります。永住者の場合はだいたい日本の企業に就職していますが、その子どもたちは皆中国に帰らせて勉強させる方向に進んでおります。

ちなみに、日本人学生はうちの華東師範大学でも200名が留学中です。中国語を勉強するという状況は、日本の永住者の親も考えていますので、それも一つの大きな流れだと思います。ただ、母語保持だけではなくて、中国人としてのアイデンティティーの問題も考えているように思います。

## 国際的な日本語教育の支援を

最後になりますが、私の海外における日本語教育に対する一つの要望、期待ですけれども、今までは、大学生を中心に日本語教育を支援して、いろいろな日本語能力テストなどが行われてきましたが、これからは日本で教育を受けて、日本文化を十分に理解している帰国児童生徒、つまり、それらの子どもたちへの国際的な日本語教育の支援を考慮し、海外における日本語教育の政策を見直す必要があるかと思います。

## 時代に求められる資質や能力への対応

小森 文部省の小森でございます。発言の機会を甲斐さんからいただきましてありがとうございます。貴重な情報をたくさん学ぶことができました。特に、印象になりますが、日本の学校教育や教育制度というのは、その時代その時代に求められる資質や能力をどう実現するかということ、そういう関係で今まで展開されてきたのではないかな、受けとめております。ですから、読み書き算、または文章を正確に読解する力があれば、または、外国の文化を正確に翻訳できれば、日本の学校教育として成り立つということであれば、それは教科書を中心とした読み書きの学習が展開される。ところが、世界の状況や枠組みが変わり、社会関係が変わると、求められる国語の力も変わってくる。自分の肉声で、音

声で自分の考えを筋道だてて表現する力が求められる。ということになると、学校教育もそれに対応していかなければならない。ただ、表現形式を覚えて表現すればよいという力ではなくて、必要な情報を集めて自分の考えを発信するという作文能力が求められるということになると、それに対応した教科書作り、教材化が進められていく。つまり、人間関係、社会関係、私たちの関係が変わると、求められる国語の力も変わっていく。それにやはり、きちんと学校教育として対応していかなければならないのかな、という印象をもちました。特に、今までの人間関係が変わりますと、従来使えていた敬語も使えなくなってくる。社会関係、人間関係、日本文化が変わると、ことばの使い方、敬語など、新しい言語運用能力が求められていく。そういうことにも対応していきたいと考えました。以上でございます。

**甲斐△** ありがとうございます。続きまして、小学校の日本語教育の現場からということで、花島健司さんに、今までの発言内容をできるだけ踏まえる形で、発言していただければ、と思います。